

〈特別寄稿〉

木質エネルギーは解決策となり得るか？②

中欧ヨーロッパの経験を踏まえた日本へのメッセージ

ミヒヤエル・ランゲ (ドイツ・シュヴァルツヴァルト在住フォレスター)

池田 憲昭 (日独森林環境コーディネーター)

マテリアル利用との競合

ドイツでは、1999年から2008年にかけて連続して起こった風害や乾燥の害で、風倒木や虫食い木など、市場でさばき切れない低質材がたくさん出たこと、そして年々の石油価格の上昇がきっかけで、木質エネルギー施設や家庭での薪ボイラーやストーブの導入が進み、木材のエネルギー利用が急速に上昇し、2010年には、マテリアル利用を上回っている。ドイツ木材産業連盟(VHI)は2010年のプレスリリースで「ドイツは、自国にとってもっとも重要な資源である木材を、このように浪費することで、わずか数年の間で、同様に大半の木材を燃やしている発展途上国と同じレベルに落ちてしまった」と挑発的な文で社会に警告をしている。

木質エネルギーは、以前は製材残材や廃材などがメインであったが、近年は、需要

が高まったことで、林地から直接供給される材の割合が多くなっている。ハンブルク大学の木材技術、木材バイオロジー研究所のフリーヴァルト教授は「経済、環境の両方の観点から、誤った方向への発展であり、木の有意義な活用ではない」と酷評している。

木材はさまざまな形で加工され、マテリアルとして利用されることによって、雇用やノウハウや技術をたくさん生み出し、使用されている間は二酸化炭素を固定する。2005年のドイツ森林・木材クラスター調査によれば、林業から連なるこの産業体は135万人の雇用を生み出している。GDPの5%を占めている。それらの雇用は森の近く、すなわち地方に分散して生まれている。

一方、エネルギー用として燃やすだけでは、経済効果は少なく、光合成で固定された二酸化炭素を排出する。経済的にも環境

保全の面でも最適なやり方は、価値の高いものから順にマテリアル利用し、それらの生産・加工の段階で生じる低質でマテリアル利用できないものを、最後の手段としてエネルギー利用することである。これを「木材のカスケード利用」という。しかし現在中欧では、木質エネルギー利用への偏った助成が原因で、薪やチップやペレットとして利用されるエネルギー材が、梱包材やパルプ、パーティクルボード材などの低質マテリアル材と競合する状況が生まれてきている。価値の高いマテリアル利用が、



「煙は煙突からだけでなく、人間の頭からも出しましょう」ハンブルク大学 木材技術、木材バイオロジー研究所教授 フリーヴァルト氏のメッセージにこめられているものとは？